

おもしろ方言学

大橋 敦夫

はじめに

一般家庭にテレビ・ラジオが普及・浸透してくる中で、方言がなくなると予想される向きもありました。⁽¹⁾が、現実には、生命力の強い地域特有の単語を中心に、現代なりの方言が息づいています。さらには、最近の出版界における日本語ブームを受けて、方言がテレビ番組で取り上げられたり、女子校生の間で全国の方言を混ぜて会話することが流行るなど、今風の方言事情が見てとれます。

本講義では、近代以降の方言の歴史を概観し、本講座「楽しい方言」の主旨に則り、新しい世紀の方言の楽しみ方を提案したいと思います。

1. 国語科教育における方言の扱いと「おもしろ方言学」の系譜

今でこそ、親しみをもって語られる方言ですが、明治以降の国語科教育においては、実は長く虐げられた存在でした。

国定教科書の使用に象徴されるように、統一的な教育普及を図った明治期の教育政策は、言語の面においても、国語科教育を通じて、「標準語」の普及・定着を押し進めようとしてきました。学校を舞台に標準語励行運動が展開されましたが、それは同時に、方言の撲滅を企図したものでもありました。たとえば、教室で方言を使った生徒には、罰則として方言札を首からさげさせるなどした、沖縄での事例がよく知られています。それは、戦前のことと思われがちでしたが、戦後もしばらく続いていたという証言もあります。⁽²⁾今でも、地域によっては、ご年配の方の中で、方言を下品な言葉・卑しい言葉として、公的な場面での使用を過度に控える方もあって、問題の根深さを感じさせます。

方言が日の目を見るようになるのは、昭和43（1968）年の小学校学習指導要領においてです。そこでは、「共通語と方言に違いがあることを理解し、また、必要な場合には共通語で話すようにすること」とあり、ようやく日陰の存在から脱する契機となりました。

表1 方言の社会的類型

	類型	時代名	時代	方言への 価値評価	使用能力
前史1	方言蔑視	京言葉の時代	江戸前期	独立	方言優位
前史2	東西対立	江戸語の時代	江戸後期	独立	方言優位
第1類型	方言撲滅	標準語の時代	明治～戦前	マイナス	方言優位
第2類型	方言記述	共通語の時代	戦後	中立	両立
第3類型	方言娯楽	東京語の時代	戦後～平成	プラス	共通語優位

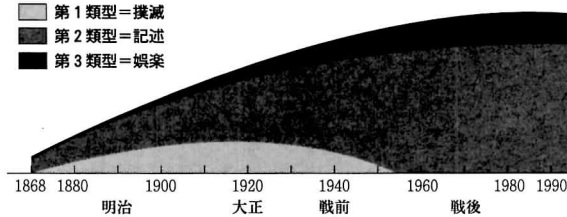


図1 3類型の変遷

(井上史雄氏『日本語の値段』大修館書店 2000.10より)

ただし、明治以降、方言については撲滅一色だったのかといえば、そうではありません。冷静に採集・記述に努める研究者もいましたし、観光関連業界を中心に、親しみを込めて方言をあしらった商品（方言グッズ）を作り出してきています（表1・図1参照）。

観光土産としての方言グッズは、今日、さまざまな種類のものが作成されていますが、「方言絵はがき」については、むしろ戦前の方が隆盛で、⁽³⁾図1の第3類型の帯を裏づけるものと言えます。

つまり、方言は、学校教育の場では、長く虐げられてきましたが、その気運は社会全体を覆うことにはならず、一方で、方言に親しみ、楽しもうとする「おもしろ方言学」の系譜も、戦前から脈々と続いてきたと言えるでしょう。

2. 近年の潮流と「おもしろ方言学」の実践

1980年代からは、全国各地の方言を効果的に使用したテレビ・商業の影射もあって、特に方言が「復権」したと思われます。新聞の見出しからも、次のようなものが拾い出せます。

◇方言の「復権」関係記事（見出し）

[全国]

- ・北海道弁がバカ受け ヤーレンソーラン北海道 すでに20万枚を突破 (1988.3.23 読売新聞 夕刊)
- ・(時の顔)「あきた弁にこだわる会」を結成した 伊藤武三さん (1988.11.18 信濃毎日新聞 朝刊)
- ・(顔)韓国で秋田弁の芝居を上演する 浅利香津代さん (1989.12.15 読売新聞 朝刊)
- ・お国なまりで憂さ晴らし 東北弁で話す会 (1988.10.5 読売新聞 朝刊)
- ・めざせ名古屋弁の“地位向上” 「広める会」が特別興行爆笑“怪気炎” (1987.8.16 信濃毎日新聞 朝刊)
- ・何と言っても名古屋弁だがね! 「全国に広める会」が旗揚げ 信長、家康・・・かつては“どえりゃあ” 天下言葉 64年の市制百周年までに復権目指す (1987.8.18 読売新聞 夕刊)
- ・名古屋弁はキレイだなも タモリの悪口もう許さん! 「広める会」きょう東京で決起 (1988.6.27 読売新聞 朝刊)
- ・(顔)「名古屋弁を全国に広める会」で氣勢を上げる 足立秀夫さん (1988.6.29 読売新聞 朝刊)
- ・方言復権の動き 名古屋弁、東京で氣勢 山形では今年も全国大会 (1988.6.30 読売新聞 朝刊)
- ・消費社会の文化変容<揺れる日本語 下>方言を見直す動き 時々を使い分けが大切に (1988.11.17 信濃毎日新聞 朝刊)
- ・純愛ソング「麦畑」 東北弁でデュエット「松つつあん」「おヨネさん」 「嫁来い運動の応援歌に 村おこしにも使いたい」 (1989.10.28 読売新聞 朝刊)

[長野県関係]

- ・信州弁を思いきり 県出身者らあす設立 大瀧町(新潟)に“話す会” (1984.10.13 信濃毎日新聞 朝刊)
- ・方言を用い、ソフトに 飯山電報電話局 民話サービスも開始 (1985.10.1 信濃毎日新聞 朝刊)

- ・「ずくだせ」貢献しました 県に大賞 小川の「創造局」表彰へ
(1989. 8. 12 信濃毎日新聞 夕刊)

共通語とともに地域の方言も楽しく使いこなす時代が到来したと、言えるでしょう。

現在の学生諸君は、学校教育で方言が「認知」されてからの学生ですので、卒業研究等のテーマ設定でも、屈託がありません。これまでに、学生諸君と次の2例のような調査に取り組みました。

(1)「リンゴがぼける」全国大調査⁽⁴⁾

長野県は、リンゴの生産量全国第2位を誇っています。県民にとって親しみの深いリンゴですが、そのリンゴが古くなって味が落ちることを「リンゴがぼける」と言います。この表現がどこまで通用するかをテーマに、全国の農協500ヵ所にアンケート調査をしました。

その結果、長野県内のみならず、北海道・東北・北陸では、およそ通用することがわかりました。反対にリンゴを作っていない西日本では、ほとんど使われていませんでした。

また、この調査では、第二問も用意し、食べ物に関わる特徴的な表現を教えてくださいようお願いしました。すると「古語は方言に残る」という定説を裏づける報告がいくつか寄せられました。

まず、豆腐のことを「おかべ」と呼んでいるという回答がありました(鹿児島県枕崎市)。かつての女房言葉が現役で使われているというわけです。

また、新鮮な魚のことを「ぶえん(無塩)」と言う例が複数ありました(長崎県松浦市・鹿児島県鹿児島市・同川内市・同中種子町など)。

この「無塩」という語は、『平家物語』(巻第8 猫間)にある用例が有名です。すなわち、信州の山国育ちの木曾義仲は、本来、新鮮で塩気のない魚介類にだけ使うのを誤解して、「無塩の平茸」と言ってしまうというものです。

これらはまた両例とも、「九州は中世日本語の宝庫」と言われることを示す好例と言えます。

(2)方言を題材にしたテレビ・ラジオ番組の全国調査⁽⁵⁾

方言「復権」の潮流の中で、テレビ・ラジオ番組における扱いは、どのようになっているかをテーマに、調査に取り組んだものです。全国のテレビ・ラジオ局249局を対象に方言を題材にした番組の有無をアンケートで尋ねてみました。

その結果、テレビ18局、ラジオ31局で、方言を使った番組を放送していることがわかりました。地域別では、東北・関西・九州が多く、特に青森と沖縄では、津軽弁と南部弁をクイズにし、お互いの地区で出題しあう番組（青森テレビ）があったり、方言ニュースのテレホンサービス（ラジオ沖縄）を実施している例がありました。そのほか、番組の題名に方言を使ったり、アナウンサーが方言で行事を紹介したりと、方言を生かしている事例がありました。

方言撲滅の時代には、考えられない変化です。

3. 「おもしろ方言学」の提案

明治から戦前のことを思い浮かべれば、「方言」には、いい時代となりました。ただし、「方言」を取り巻く状況は好転したものの、肝腎の「方言」自体は、「撲滅」の時代を経験し、変質してしまった面があることも事実です。失われてしまったものを元へ戻すことはできませんが、今の状況を生かして、「方言」を楽しむことは十分に可能です。

そこで、身近にある長野県方言を題材に取り組める筆者なりの「おもしろ方言学」について、いくつかのプランを以下に示したいと思います。

(1) 『長野県方言辞典』の作成

本講座の講師をお願いした馬瀬良雄先生・出野憲司先生をはじめ、仲間の先生方とともに、20世紀に現れた長野県内の方言集の集大成を企画しています。あわせて、可能な限りの現地調査を盛り込む予定です。長野県方言の使い手である県民の皆様と共に作り上げるという姿勢を大切にしたいと考えており、本講座をお聞きの皆様をはじめ、広くご協力をお願いする次第です。

(2) 『長野県方言辞典（医療・福祉版）』の作成

近年、医療や福祉の現場を中心に、世帯間の言葉のギャップが指摘されています⁶⁾。高齢化が進んでいる一方で、3世代以上の同居家族が8%以下

という現実を考えると、日常生活で、祖父母の世代から受け継ぐ方言が減少していることが察せられます。とは言え、この分野でも、方言差は厳然として存在し、たとえば、内出血した部分を見て、「ぶすど色」（須坂市）「ぶっと色」（武石村）などと表現したり、あるいは「血が死んだ」と言ったりします。

事態は、人命に関わる緊急を要する場面が多いと思われます。図などを多用して、使いやすい内容を工夫して仕上げたいと思います。

(3)『信州方言アラカルト』の編集

すでに馬瀬良雄先生による名著『信州の方言』（1971）があり、さらに後継の『信州のことば』（2003）も刊行され、屋上屋を架すの観もありますが、気軽に向き合える話題を中心にした、手頃な新書版サイズの入門書が企画されたらおもしろいと思います。

以下に、候補となる話題と主なテーマを挙げてみます

- (1) 気候と方言…雪に対するイメージが北信と南信とでは、ずいぶん違います。その辺りを切り口に気候の方言の地域差について。
- (2) 東西対立…牛山初男氏によって示された東西方言の境界線の現状について。
- (3) 「馬瀬」の公式…「雪だ・音だ・石だ・集める」を発音すると出身地域がわかるという、馬瀬良雄先生考案アクセント図。
- (4) 気づかれにくい方言…共通語とは違う使い方をする語の紹介。たとえば、「お静かに（＝ごゆっくり）」など。
- (5) 誤解された方言…前項と同主旨で、失敗談を伴うもの。他県の学校で「とべ（＝走れ）」と言っても、生徒に通じなかった先生の例等。
- (6) 共通語に入った方言…「尾根（＝山の稜線）」などの紹介。
- (7) 犯罪捜査と方言…脅迫電話のアクセント分析が犯罪捜査に貢献した事例の紹介。
- (8) 方言をめぐる慣用語…碓氷峠辺で、「あちゃ（信州）とだんべ（上州）の国境」などと伝承されている句の検討。
- (9) 早口ことば…「せったかせわねかせってみろ（＝言ったか言わないか言ってみろ）」。類例の収集。他県との比較。

- (10)方言イベント…方言かるたの作成やかるた大会開催の紹介。
- (11)方言土産…現状の報告。
- (12)方言グッズ…逸品の紹介。
- (13)地名の方言…「軽井沢」は、「かるいさわ」か「かるいざわ」か。「長野」は、「ながの」か「ながの」か。読みやアクセントをめぐって話題を展開。
- (14)民話の方言…作品の中での使用状況。キーワードの調査。「語り」における方言の使用について。⁽⁷⁾
- (15)古典の方言…近世期の郷土資料を読み返しながら、方言ならびに関連の記述をチェック。
- (16)藩領と方言…現在も方言意識に旧藩領がどの程度影響しているか。「～ずら」を「六万石ことば」(松本藩)、「～だらず」を「十萬石ことば」(松代藩)と称する例など。
- (17)移住と方言…会津若松の蕎麦店にある「高遠(＝おろしそば)」という品目。保科正之の移封との関係。
- (18)外来語と方言…オランダ語起源の「ポットル(＝鉛筆)」「(長野市)などの例の検討。
- (19)語源をさぐる…「小屋」「まえで」「ずく」など頻度の高い語の語源の考察。
- (20)民衆語源…「行かず(＝行きましょう)」を真田の逆さ言葉と説く心理について。
- (21)混交と複合…信飛国境地帯における「か」と「ぶよ」の例等。
- (22)ガ行鼻濁音…本来的には発音できる地域でありながら、若い世代を中心に失われつつある状況についての考察。
- (23)F音(ハ行音)…秋山郷の例を中心に紹介。
- (24)謎の方言…「こくる(＝のどが詰まる)」の使用範囲が異常に狭い(長野市のごく一部)ことをめぐって。
- (4)『信州方言研究者列伝』の編集
- 地域の方言研究の手引きとして、他県に非常に良いモデルがあります。それは、和田實氏・鎌田良二氏編『ひょうごの方言・俚言』(神戸新聞総合出版センター<神戸市>1992.5)です。兵庫の方言の概説と共に、方

言研究のあゆみや研究の先覚者たちが紹介され、これから兵庫方言の研究を目指す人達への指針を示している点がすばらしいと思います。

そこで、この良きモデルに倣い、長野県方言研究の入門書とも言うべきものを次のような内容で企画してみました。

I. 目次構成

はしがき

信州方言研究史概説⁽⁸⁾

列伝

あとがき

II. 列伝の執筆形式

略伝

研究史上の業績

主要著書・論文の紹介

文献目録

III. 列伝収録予定人物

近代以前・・・小林一茶

近代以降・・・柳田国男・東条 操・河原 宏

佐伯隆治・井上福實・足立惣蔵

牛山初男・青木千代吉・福沢武一

浅川清栄・上原邦一・馬瀬良雄

芭蕉の説いたごとく、研究者の跡を求めるものではなく、研究者の求めたものを求められるような内容になれば、今後の調査研究の位置付けも明確になり、おもしろさが増すと思います。

(5)基本的資料の復刻・翻刻

過去に公刊されたものながら、時間の経過や小部数発行といった点から入手困難になっている方言資料については、復刻（復刊）が望まれます。

たとえば、次のようなものです。⁽⁹⁾

北信・・・長野市及び上水内郡方言集（佐伯隆治）・川中島平方言集

（更北中学校）・更級郡方言調査書（更級郡校長会）

東信・・・俚言抄（武田喜伝治）

中信・・・北安曇郡方言取調（北安曇郡役所）・乗鞍高原の方言

（齊藤岩男）・東筑摩郡方言（東筑摩郡教育会）

また、これまで活字化されていない資料にも、貴重なものがあることが知られています。

たとえば、以下のようなものです。

方言調（千曲市・県立歴史館蔵）・・・県史編纂事業の一環として、明治24（1891）年に行われた方言調査の結果を綴じ込んだ書類。郡役所を通じて、県内全域を対象にしており、地域差・その後の変遷をうかがう好資料です。活字化をめざして、翻字作業に取り組みられている方があり、完成・公刊が待ち望まれます。

鹿児島言葉笑いの種（長野市・真田宝物館蔵）・・・松代藩最後の藩主の奥方が書き残した方言のノートです。鹿児島からお興入れした奥方が備忘録的に、鹿児島の言葉と共通語とを対比させたもので、単語の対比のほか、いろいろな場面の会話も書き留められています。信州方言を記録した部分はありませんが、信州ゆかりの資料であり、同時期の方言資料が発見されることを期して、翻刻したいと思っています。本文は、すでに本学の卒業生が翻字済で、近々活字にする予定です。

(6)方言グッズの収集・分析

方言グッズとは、方言をあしらったさまざまな商品・名称などの総称で、日高貢一郎氏（大分大学）が提唱され、一分野として確立した観のある方言の「考現学」⁰⁰です。日常生活の中で、どのように地元の方があしらわれているかを探ると、その地域で生命力の強い単語が何か浮かび上がってきます。どこに、どんな方言が使われているか、たえず注意していると、好奇心旺盛な生活が期待できます。

(7)総合学習の教案作成と実践

主要教科の時間数を削っての実施には、学校現場でも批判のあった総合学習ですが、明治5（1872）年の学制発布以来、教師自身が初めて自分で教材内容を選択設定できるという点では、まさに画期的な学習です。国語科の先生方の中にも、その点を積極的にとらえ、テーマを方言に設定し、意欲的な実践をされる方がいらっしゃいます。方言調べ・カルタ作り・世代間交流等さまざまな活動が小・中・高で実践されています。それぞれの段階の内容を連携の取れた内容のものにすることで、これまでの郷土学習とは、一味違った仕上がりが期待されます。すでに実践されている先生方の教案を集積し、よりおもしろみのある教案・実践に筆者も関わりたいと思います。⁰⁰

4. おわりに

目下、筆者自身は、前節3の(1)でふれた、『長野県方言辞典』の作成に全力を傾けております。編集仲間の先生方と仕事を進める中で、長野県方言研究の気運が広く高まることを願っています。方言調査は、話し手の協力が欠かせません。この講座にご出席の皆様はもちろんのこと、多くの方々のお力添えを再度願ってやみません。

注

1. 「ウェーブ'90 大野晋さん(国語学者) 『方言は二、三十年で消える』(1990.9.28 信濃毎日新聞 朝刊) 参照。

2. たとえば、次のような証言があります。

「沖縄の方言札のことを戦前のことのように言う人がいますが、とんでもありません。私は戦後生まれですけど、学校で方言つかって、方言札を首からかけさせられて、立たされたことがあるんですから。だから方言も共通語も、自由に話せないまま大人になりました」

(永 六輔『普通人名語録』講談社文庫 1991.6)

3. 大橋敦夫(2004) 参照。

4. 『図録 「リングがぼける」全国大調査』(上田女子短期大学国語研究倶楽部 1995.10) 参照。

5. 久保田恵里・櫻井あゆ美・古畑亜貴子「マスコミの方言—放送番組全国調査から—」『学海』13(上田女子短期大学国語国文学会 1997.3) 参照。

6. 「福島・相馬地方119番 「どのっから」「けいちゃむくれ」「かんかち」・・・方言での通報 若い隊員「？」 核家族化で なじみ薄く 専門家招き徹底研修」(1999.2.6 産経新聞 朝刊) 参照。

なお、すでに各地で次のようなものが作られています。

『介護学生のための 三つの津軽ことば』(横浜礼子氏/路上社<弘前市>2004)

『医者があつめた越後の方言集—お年寄りの心を聴くために—』(黒岩卓夫氏・横山ミキ氏/考古堂書店<新潟市>1993.5)

『医療沖繩語辞典』（稲副盛輝氏／2200.7.18 日本経済新聞 朝刊参照）

7. エッセイの中に巧みに、方言の会話を生かした宇都宮貞子氏の諸作品についても取り上げてみたいところです。
8. すでに馬瀬良雄先生にお願いして、その一部を執筆していただきました。（馬瀬良雄氏「長野県方言研究史（1）」『長野県方言関係研究文献目録（稿）』（上田女子短期大学国語研究倶楽部 2002.3）参照）
9. 書誌については、『長野県方言関係研究文献目録（稿）』（上田女子短期大学国語研究倶楽部 2002.3）参照
10. 日高貢一郎氏「宮崎における方言グッズ」『国語の研究』15（大分大学国語国文学会 1991.3）参照。
11. 微力ながら、高等学校での総合学習に関わるチャンスをいただきました。県立屋代南高等学校で、国語科の阿部博美先生が企画・推進された総合学習です。（阿部博美氏「授業「ことのは」～方言話者から学ぶ～を通して」『やしろ』12（屋代を語る会<千曲市> 2005.12）参照）

参考文献

井上史雄氏『日本語の値段』（大修館書店 2000.10）

馬瀬良雄氏『信州の方言』（第一法規 1971.7）

馬瀬良雄氏『言語地理学研究』（桜楓社 1992.11）

馬瀬良雄氏『信州のことば 21世紀への文化遺産』

（信濃毎日新聞社 2003.6）

大橋敦夫 「方言と観光文化——方言絵はがきの考察を中心に——」

『上田女子短期大学観光文化研究所 所報』2（2004.3）

